

研修を通して伝えたいこと

糸魚川中学校 2年1組 熊木 萌々

私は広島派遣研修に参加して、原爆や戦争についてたくさんのことを見聞きし、学んできました。参加前は、学校の授業で戦争について学んではいましたが、あまり実感がないのが正直なところでした。

平和記念公園には、数多くの千羽鶴があり、海外からたくさんの人が訪れていて、「平和」は世界共通の願いなのだと感じました。

被爆者講話では、当時の様子を詳しく教えていただきました。約3,000度～4,000度にも及ぶ熱線で、人間の皮膚や当時の広島の日常を一瞬で焼き尽くしたそうです。また、爆心地から600m以内にあった屋根の瓦が、高温の熱線にさらされて泡立ち、ざらざらになったものを実際に触らせてもらいましたが、その時、私ははっとし、ようやく原爆の恐ろしさについて実感が湧いてきました。あんなに硬い瓦をも溶かすほどの熱線が、人の皮膚に当たり、ドロドロに溶けた様子を想像し、とても苦しく、胸が押しつぶされそうになりました。

ある被爆者の方のお話で、当時の広島は地獄だったとありました。まちにあふれていたたくさんの笑顔を、たった一発の原爆によってすべてを灰色の世界へと変えてしまったこと、助けを求める声と絶望の涙でまちが埋め尽くされたこと、まさに地獄のようです。平和は願うだけでは訪れず、自分たちの日常を守るためにも、私たちの手で平和を作らなければならない、という言葉があり、私は胸がとても熱くなりました。

大和ミュージアムでは、戦死された方々の言葉に触れてきました。特攻隊員た

ちの家族に向けた手紙や遺書、音声などたくさんの物がありました。ある特攻隊員の遺書には、『お国のために、我が命を捧げられることを嬉しく思う。』とありました。今では考えられないほど雑に扱われていた命。ただの消費物としてしか考えられていなかった一人一人の命。好き好んで戦争している人は誰もいなかったはずです。行きたくない、死にたくない、大切な人と普通の生活がしたい…、本当は誰もがそう思っていたことでしょう。でもお国が決めたことに逆らうことが許されるはずありません。どんな思いで戦闘機に乗り、敵軍へと向かって行ったのでしょうか。とても辛い状況下に置かれていた隊員の方々の思いが、ひしひしと伝わってきました。

わたしたちは、当時被害を受けていないから関係ない、生まれていなかったから知らない、でよいのでしょうか。原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さから目を背けてはいけません。まずは戦争について一つでも多くのことを知り、日本が、世界が、このような悲惨なことを二度と繰り返さないよう、私は学校の報告会などを通してたくさんの人たちに伝えていき、平和について一緒に考えていきたいです。
